おかげさま

別冊

真宗大谷派
高德寺通信

2021年 秋

高徳寺報恩講　2020.10.24

法話スペシャル

『人間の本質』

～新型コロナウイルス感染拡大から
問われていること～

講師

横須賀・長願寺住職

海法龍（かいほうりゅう）氏

※ユーチューブ＝YouTube～カリフォルニア州に本社を置く、米国のオンライン動画共有サービスを行う企業。

こんにちは。長願寺住職の海と申します。どうぞ宜しくお願いします。昨年も報恩講にご縁を頂いて来させていただいてます。昨年とはずい分様変わりしている報恩講だなぁ、ような思いをしております。こちらのご住職も、この報恩講をお迎えするにあたって、ずい分悩まれたと思います。まあ、あの本当に一ケ寺一ケ寺のお寺さん達がどういう風に親鸞聖人の報恩講をお迎えするかということは、非常に悩んでおられることでもあります。まあ、いろんなかたちを模索して勤めておられるし、又勤めていかれることだと思います。本当に、内勤めというですね、お寺のご住職…お寺の内部だけで報恩講をお勤めされるところもあるし、このようにして、ある程度の人数を決めて、役員さんや、世話人さんのスタッフの方々のみが、ご参詣いただいて、お勤めされるところもあります。今日はそれに加えて、オンラインで、こちらに来れないご門徒の方、ネット環境のある方々に伝えていきたい、届けていきたい。又、ユーチューブでの配信ということでございますので、高徳寺さまにこれまでご縁がなかった方々も、もしかすると、この※ユーチューブを通じて、ご法話を聴聞されるということも可能性としてはある訳ですね。そういうことも試みとしてですね、今日はオンラインを導入されているということでもあります。そういうことを工夫しながら、悩みながらの報恩講ということでもあります。あらためて報恩講ということが私たちにとって親鸞聖人のご正忌をお勤めするということは、どういう意義があるのか、どういう意味をもっているのか。その報恩講をお勤めするこの高徳寺さんが、真宗のお寺としてどういう意味を持ってこの時代、この世の中に存在しているのか。そういう事柄が、今回のことであらためて私たちに問われているんだなァ～ということを強く感じております。問いかけというのは、本当は毎年毎年行なっている訳ですから、毎年毎年問いかけられている訳ですね。まあ、もっと言うならば、毎日毎日問いかけられている訳です。だけど年中行事を行なっていく中で、それをこなしていくのに、皆、精一杯というか、なかなか立ち止まって自分たちのこの報恩講とは何なのかとか、あるいはお寺とは何なのか…ですね。

そしてその教えに触れる自分とはいったい何なのか？…ですね。なかなかそのことをあらためて問われてくるということが難しいような感じもいたします。私たちの上に問いかけということを感ずる時は、どういう時かというと、やはり今まで出来ていたことが出来なくなる。あたりまえにあったものが失われていくこと。物事が終わっていくとき。終わりそうなとき。そういうときにですね、あらためて今まで自分たちは何をやってきたのかということが、はじめて意識的に自分の身の問題として、あらためて問いが顕在化してくるんじゃないかなァ～と感じております。特に、こういうコロナの状況下ですから、言えば皆さんの生活ということも、ずいぶん変わらざるを得ないような、状況がある訳ですね。こうやって皆さん、マスクしてここにいるなんてことは、去年から思うと考えられなかったしそういうことを思うと、私たちの暮らし方というのがやっぱり変わっていくというか、変わらずを得ない…そういう状況の中に私たちがいる訳ですね。そうすると、今まであったものが、先程言ったように、行なえない…まあ、終わっていくというかな。あるいは言葉は合わないかもしれないけども、物事によっては、なくなっていく？死んでいく。そういう、感じがする訳ですよね。そうするとあらためて、今回のコロナという状況下は私たちに、これまでの我々の生活っていったい何だったのか…ということが実はあたりまえにしていたものがどうだったのか？ということがあらためて足元から根本的に私たちに、この現状からこの事実から問いかけられているということを感じます。コロナは敵だという風な表現が沢山ありますけれども、たしかに感染すれば命を失う方もいらっしゃる訳ですから。敵は敵かもしれないですよね。だけども、そういう敵だという状況を生み出しているのはいったい何なのか？ということもあるはずですよね。まあ、そういうことを思うときに、こうやって終わっていく中で、変わり目の中で、私たちのコロナ禍の中にある在り方と言うんでしょうかね。そのことも同時にコロナとの関係の中で、私たちはいったいどうなのか？たまたま新型コロナウイルスという形で表われているけれど、そういうことも足元から問いかけられているような感じが非常にする訳です。言えば、コロナということであってもですね、自然現象の中のことですよね。その自然というか、私たちの環境というかそこから実はいつでもどこでも誰でも私たち

はその中にあって人間としての営みというものが実は、問いかけられているんじゃないでしょうかね。問いかけられているんだけども、何も起こらないような時は、自分の中で変化がないような印象の時はですね、それが問いかけにならないですよね。自然からの還境からの問いかけっていうのはあまり意識できない。だけれどもこういう状況の中で、実は環境からも、そして、この状況からも私たちが営んできた歴史そのものからも問いかけられているんじゃないか…。我々は本当は、人間という存在は：問いかけられている存在。問いを持つとか持たないとかという以前に、私たちは生存している。存在している事実。その事実の奥底から問いかけられているのではないかなってことをですね、この頃とても強く感じさせられていることでもあります。今日は親鸞聖人の報恩講ということですから、そういう意味で言うと報恩講っていつから始まったのかと言うと、親鸞聖人がその人生を終えられたところから始まっているんですよね。亡くなったところから。死というところから始まっている訳です。親鸞聖人が始められた訳ではないんですよね。残された方々が始めた訳です。親鸞聖人の人生が終わっていったという事実。その事実から当時、親鸞聖人に出遇った方々が、親鸞聖人の90年の人生は何だったのかと問わしめられている。その親鸞聖人に出遇った自分たちは、親鸞聖人からどういうことを聞かせていただいたのか。親鸞聖人がどういう思いの中でこの南無阿弥陀仏の教えに出遇って、南無阿弥陀仏の教えに生きて南無阿弥陀仏の教えを伝えてくださったのか。それに触れた自分たちは、その教えを聞いて、自分はどうだったのか。まあ、そういうことがらが、亡くなってみて初めて親鸞聖人という方を失って初めて問いかけられてくる。問いが生まれてくるということですね。生きてらっしゃる時はね、聞けて当たり前ですけど、亡くなれば聞けない訳ですから。余計そのことが強く思われたのではないでしょうかね。ですから教えられたことを忘れない。親鸞聖人の人生を忘れない。南無阿弥陀仏の教えによって自分の人生が開かれてきたということ。そのことをやはり大事にして、そして次の世代、次の世代にもこの教えが相続されていくことを願ってこの仏事、報恩講ということが行われてきたんです。親鸞聖人のお書

きになった〝正信偈〟…今日もお勤めしました。そしてご和讃。そしてそのことの根本にある南無阿弥陀仏。そのお念仏を申して、この報恩講を勤めてきた訳です。あらためて親鸞聖人が出遇った教えに出遇い、南無阿弥陀仏のおこころに出遇い、そしてそのことを通して自分たちの今を見つめ、これからをまた考えていく。そういうことじゃなかったかと思いますね。ですので、その当時も沢山の方がいろんな状況の中で亡くなっていくということがあった訳です。さき程、蓮如上人の「疫癘のお文」が拝読されましたけど、蓮如上人の時代もこの伝染病、つまりウイルスによる感染症というのは沢山あった訳ですね。親鸞聖人の時代もそうです。88歳、亡くなる2年前にもそのウイルスによる感染症が関東の地で広まり、そして多くの人々がそれで亡くなっていった。そのことに対するお弟子さん達のお手紙があって、それに対して親鸞聖人がお返事のお手紙を書いていらっしゃる。そういうものが残っているんですね。疫癘という言い方でしたが、伝染病で亡くなっていく姿を見て、この死ということから当時の方々が南無阿弥陀仏の教えというのは、いったい自分にとって何なのだろう？ということが逆に問いかけられている。そういう内容を持っております。まあ今日は詳しくそこまで入っていけませんが、そういうお手紙も残っている訳です。蓮如上人のさき程の疫癘のお文ものち程少し触れていければ良いかなと思います。言ったように「死」ということ、皆さんも身近な方を亡くしてこられたと思います。その時にきっと皆さんの中には、亡くなった方の存在から、人生から問いかけられてくるものがあったんじゃないでしょうかね。同時に、問いかけられていく中で、自分も死んでいくのだ。死ということに対して、終わっていくということに対して、失っていくということに対して、どんな思いでいたのかということがそこに顕在化する。あらためてそこにあらわれてくる。私たちの心があらわれてくるんですね。何もない時は出て来ないけれども、何かあると我々の本音が出て来るんですよね。私も…兄と父が亡くなりましたけれども、やっぱり死を悼むということ、兄の人生や父の人生を訪ねていくということももちろんあるし、そこからいろいろなことを問われることがある訳ですけれども。同時にですねえ、自分もまた死んでいくんだなあと。その中でやはり自分はまだ死にたくないなとか、こんな病気になりたくないとか、そういう自分の気持ちっていうか、自分の思いが出てくるんですね。ああ、

この思いは実はそれに触れる前からあって、そしてこれからもそういう自分の気持ちっていうのは、消えないんだろうと。ある意味では自分がそういう気持ちの上に立って全てをみつめていたんじゃないかと。すべてに向き合っていたんじゃないかということですね。そうすると、死とか失なうとか自分の思いに反して変わっていくってことはあまり認めたくないし、受け入れたくないですよね。だけどそういう現実を受け入れざるを得ない。その中で自分が悩み苦しむ訳ですよね。そういう事柄があらためて顕在化するというか、自分自身のあり方がそこに問いとして浮き上がってくる。まそんなことを感ずることです。先週の金曜日に、九州の甥から電話がありました。私の出身が熊本なんですが、兄が亡くなっておりますので、甥が実家の寺の住職をしております。実家の斜め前にあるお宅のばあちゃん(※血の繋がりはなくても、ばあちゃん、ばあちゃんと呼ばれていたそうです)が亡くなったという連絡でした。亡くなったという知らせを受けて、自分の小さい頃からのふる里で過ごしたことが走馬灯のように蘇ってきました。すごく可愛がってもらったんですよ。いくつで亡くなったのか聞いたら、100歳だったんだって。本当にすごく可愛いがってもらったもので、いろんな思い出があるんですよね。それが蘇ってきました。そのばあちゃんは、若い頃にご主人を失ってるんですね。おうちが非常に大変な状況な時がありまして、ご主人が亡くなって一層大変な状況に追い込まれていくような感じだという話を聞きました。その時に…ご主人が亡くなった時に…後で本人から聞いたんですが、「葬式で泣ける人は幸せだ。私はこれからどうしたらいいのか。もうそのことで頭がいっぱいで、泣いてる暇がなかった…。」ということをおっしゃっておられました。まあ、子供ながらに、最愛の夫が亡くなってもやはり厳しい状況の中で、それを担っていかなきゃならない。ばあちゃん…当時はおばさんでしたけど、厳しい中をいるんだなあってことを子供ながらに感じました。そしたら子供さんが2人いるんですが、長男さんが事故死したんですね。ですから、おうちのことでも苦労してこられたし、そうやって自分の身内を、夫も息子も亡くしていかれた…。そういうおばさんの姿を見て来ましたので、ものすごくそこに深い悲しみがあって、その中で私に対する眼差しがとても優しかったなあと。ということもばあちゃんの死の知らせを受けていろいろ思わせられました。

※お西さん…西本願寺派

それで、ばあちゃんの通夜・葬儀が土日ということもありましたので、電報を打ちました。まず、ばあちゃんと僕らは呼んでましたので…「ばあちゃんには小さい頃から可愛がってもらいました。また一つふる里が遠くなってしまいました。ご逝去のお知らせに寂しさを感じています。でも可愛がってもらった出過ぎをいただいて私は幸せでした。長い間本当にご苦労様でした。そして、有り難うございました。南無阿弥陀仏。」…ま、そういう電報を出させて頂いた訳です。非常に自分にとってそのおばさんの姿というのは、何か考えさせられました。成人して実家に帰る時は、そこのおうちにいつもお土産とご仏前を持ってお参りに行きました。お土産はねえ、いつも決まってるんですよ。今日はオンラインで放送になるから、メーカーの名前は言えないけど…(笑)あの、焼売。うちの近くの焼売。(笑)真空パックなので日持ちするしね。いつもそれをお土産にしてご仏前を包んでおうちのお内仏にお供えしてね…お西※さんのご門徒さんなんです。そうやってよくお参りに行きました。で、帰る時にね、ご仏前に置いていくもんですから、氣をつかってお土産を買っておいてくれて、私に渡すんですよ。だから母がね、もう

ご仏前をするなと…氣をつかわせるから。ということで最後の方はしませんでしたけれども…。まあそういう思い出があります。そのばあちゃんは息子さんも失くしてらっしゃる。息子さんが亡くなってらっしゃるということは、兄の姿を見てますから、ずっと感じるものがありました。なぜかと言うと、7年前に64歳で亡くなった私の兄と、小学校3年生の時に亡くなったばあちゃんの息子さんは同級生だったんですよ。私の村に結婚式があって、昔は祝言と言いましたが…その祝言は自宅で行われる訳ですね。で、真宗のお寺のご門徒は、言えば、お内仏の前で結婚式を挙げる訳です。そして親族、近所の人たちがお祝いをする。で、その祝言を兄と亡くなったばあちゃんの息子と、あと一人の友達と3人で、見に行ったんですね。そこはタクシーが停まってたんです。どういう訳か分かりませんが、そのタクシーが急にバックして来たんですって。それで、後を見たら溝があって、で、私の兄ともう一人の友達はその溝を飛び超えた…。だけど、ばあちゃんの息子さんは飛び超えられないでその溝の下におりたんですね。そしたらタクシーが急発進でその溝の中にうしろから落ちたんです。彼はその下敷きになったんです。それで亡くなった訳です。その友達の死ということを私

の兄もその友達もずーっと抱えて生きてきた訳です。きっといつも心の隅にそのことがあったんじゃないでしょうかね。小学校3年生で死んだ友達。その友達は死んで自分たちは助かった。その自分たちが助かったこのいのち、この人生がある訳ですよね。実はですね、私の兄が死んだ時にその友達が弔辞を述べてくれたんです。その弔辞には、小学校3年生の時に結婚式を見に行って、僕と君は助かったけれども、彼は死んでしまったと、そういうことですよね。で、僕らはここまで彼の死ということを胸に抱きながら、あらためて君が死んで、どんな人生だったのかということを考えさせられた…ということを弔辞でおっしゃっておられました。自分は64年あまり生きてきて、それなりに団塊の世代として時代をリードしてきた。それなりの仕事をしてきて、それなりに頑張ってきた。しかしこのまま自分が、このままの状態で生きてどうなるんだろう。何かやり残したことがあるような気がしてならない。君はどうだったのだろうか？ 君はお寺の住職として生きてきたけれど君の生き方を見ていると、僕は非常に思うところが多くあった。君のような生き方を自分もしていかなくてはならないという気がして、今はならない。その前に、その友達が死んだということが弔辞の中にありました。この最後に弔辞を読んだ友達は、その小学校3年生で死んだ、その死ということから、あらためて私の兄のその時一緒だったもう一人の友達の死をとおして、問いかけられている訳ですね。死というのは私たちに問いかけてくる訳です。人間は問いを持つところに、問いかけられてあるというところに実は人間が人間としての姿があるということではないでしょうかね？ その問いということを失ったときに、問いかけということが無いままに人間が生きるならば、それは人間が人間を失った姿じゃないか。そんなふうに感じられてならない訳です。親鸞聖人は90年の生涯でした。9歳の時に出家・得度していらっしゃいます。3歳…これははっきりいたしませんが、幼少の頃に母親が亡くなったというふうに伝えられています。小さい頃に母の死を経験してらっしゃる。そして親鸞聖人の血筋である日野一族。日野家。ご自分の家ですねぇ。そして一族です。その一族が沈落していくんです。そして一家離散になっていくんです。日野家は、そんなに身分の高くない貴族の階級だったというふうに言われておりますけど…。その沈落した家の子供たちが生きていく道は、きっと出家ということしかなかったのかなぁと思います。生きていくために出家させられたんじゃないでしょうかねぇ。そう

いうふうに考えた方が自然のように感じます。でもそのことが大きな機縁だったということは確かですね。つまり母の死、そして一族の死。家の死ですね。その死ということを身に受けながら、親鸞聖人が20年の間仏教を求めていく。そしてそこに悟りを開いていく。本当の人間になっていく。そういう道が始まったんじゃないでしょうかね。だけれども、その道は残念ながら仏教の精神をどこかで見失った姿として親鸞聖人は感じていかれました。当時の権力と深く結びついた比叡山仏教、南都北嶺、奈良仏教。そこにですね、一部の人達が仏教の教えに触れられない。そしてその人達が権力を握り、又、自分達がエリート化していく。そして民衆ということが自分達のまなこから抜け落ちる。仏教は一切衆生の救いと言っているはずなのに、そうなっていない現状だということを親鸞聖人は肌身をもって20年間の比叡山の修行の中で感じていかれたのではないでしょうかねえ。つまり、仏教と言いながら、仏教が死んでいる。そしてその前に法然上人がやはり同じような思いの中で、比叡山と決別して山をおりていらっしゃいます。それと同様に親鸞聖人も29歳の時、比叡山と決別しました。言えば、仏教が死んでるってことですね。でもその死んでるような仏教を自分は学んで来たと。自分の学びっていったい何だったのか…？本当の仏教って何だったのか？というところから実は親鸞聖人の本当の歩みが始まって行く。そして法然上人のもとで5～6年ナンマンダブツの教えを学んでいって、本当の仏教に触れていかれるんですね。そこは吉水という所でした。京都の東山のあたりです。そこには貴族もいるし、武家階級の人たちもいるし、庶民もいるし当時残念ながら虐げられた、差別された方々、宗教的にも差別された方々が集っていたというふうに言われてますから、このように同じ所に、当時の身分社会の中で身分が違う人が一同にそこにいるというのは、考えられないことですね。これは何をあらわしているかというと、存在の平等性ということです。どんな人も人としていのちを生きているならば、同じだということですね。当り前のことだけど、当時はそれは当り前ではありません。じゃあ今は当り前かと言うとそれは難しいですね。言葉では知っているけども、頭の中では分かっているつもりだけど、我々は平等だっていうことは、あまり好まないですよ、本当は。自分は特別だって、自分は上だって…。自分の方がまわりを支配

していくような自分を私たちは好みますから。そういう心は、実は平等ということを望んでない。そういうことが見えてくるのではないでしょうか…。親鸞聖人は吉水におられましたけど、平等性という教えは権力側にとって、比叡山、南都北嶺にとっても都合が悪い。で、いろんなことがあって残念ながら弾圧されていく訳ですね。吉水という所が死んでいく訳です。殺されていく訳です。でもそのことによって北陸に流罪になっていく。法然上人も流罪になっていきますけども、その流罪になっていくということがね、罪人として新潟の地に身を移されていくというところに又、親鸞聖人にとって自分の歩みの中で、深い問いが新たに生まれてくる訳です。親鸞聖人が40歳の時には法然上人が亡くなりますから。法然上人からいただいた教えとは、何だったのかっていう問いが又、顕在化するんです。そのことにこたえていくために、教行信証を書かれました。そして関東の地に赴かれた時も、飢饉で亡くなっていく人たちの姿を見て、浄土三部経を読誦しようと思いましたけれども、それを途中で断念されたということが伝えられております。死者に捧げるお経じゃないんだということですね。それは分かってたつもりだけども、やはり目の前の死者を見た時に、死者に捧げるお経になっていた。実はその死ということを通して、もっと深いものを私たちは教えられている筈だと。それが南無阿弥陀仏の経典のこころじゃないかということですね。そこに又立ち返っていくような問いを与えられている訳です。晩年は京都へ帰られた後、関東の地で親鸞聖人の教えを受けた方々の中で、ずい分混乱してきます。教えが違った形というか、自分たちの勝手な解釈で広まっていく。つまり教えが死んでいくんですよね。異っていく…。歎異抄という本がありますけど、異っていくということは死んでいくということです。ですからそういう危機感の中で関東のご門徒から要請されて、自分は行けないから長男の善鸞さんを自分の名代で遣わします。ところが、どういうことがあったのかは分かりませんが、善鸞さんは自分だけが父親から教えてもらったものがあるんだと言ってですね、また混乱に拍車をかけていく…。でやはりけじめをつける必要がありますので親鸞聖人は、お手紙の中で、親でもなければ子でもないと、義絶状と言いますか、そういうお手紙を書いて門弟たちに示していらっしゃいます。そういう形で、親子の関係が終わっていくんですね。親子の関係が死んでいく訳です。でもそのことが又、親鸞聖人に南無阿弥陀仏の教えが自分にとってどうなのかという形で大きな大きな問いかけとなって正像末和讃という書物を書く契機となっている訳です。親鸞聖人は生まれてから亡

くなる90年の間に、いろんな人と出遇って、その間にいろんな方が亡くなっていったのではないでしょうかねぇ。自分の近親者も含めて。自分の出遇った方々が沢山亡くなっていかれた…。だから親鸞聖人はいつでも死ということに触れ、死ということをくぐり、死ということからいつも問われ続け、その問われたことを南無阿弥陀仏の教えに又、尋ねていらっしゃったのではないでしょうか？親鸞聖人のご在世中、元号が33回変わってるんですね。今は、天皇一代で変わります。当時はころころころころ変わっていくんです。社会の不安定さというか、政変だったり、飢饉だったり、震災ですね、そういうことが続いて起こっていくときに元号が変わっていきます。そしてもう一つは、やはり疫癘ですね。疫癘っていうのは、先程言ったように伝染病ですね。つまりウイルスによる病です。疫癘で亡くなっていく方々が沢山おられたということです。昔は移動はそんなにいたしませんので、風土病と言われたかもしれませんけど、天然豆もその一つです。中国との交易が始まって、中国から天然豆がもたらされた。それによって当時沢山の方が亡くなったので、奈良の大仏さんが建立されたと言われています。当時はそれがウイルスだってことが分からない訳ですから奇病と言われてました。原因不明の奇病。何かに取り憑かれたとか、何かが祟っているとか、障っているとか、その人の前世の行いが悪かったとか、生きている時にやったことが悪かったとか…。まあそういうことですよね。だからそれを悪霊が取り憑いているとか言われ、それに関わった人たちはものすごく非難されて、攻撃されていく訳です。で、その人の家族はその土地に住めなくなるなんてことはいっぱいあった訳です。その土地を追われるようなことがあったと聞いております。なんか今と変わらないでしょ？ねぇ。感染症になった方々を攻撃してねぇ…。で、結局、ウイルスが悪いから、奇病だから、悪霊だって訳でしょ。当時は。それを退散させる、撲滅させる。そういう法要を行なっていたんです。それはいわゆる祈祷ですね。祈祷・呪文ですね。お経の力によって鎮める。退散させる。撲滅する。ま、今でもね、そういう法要が行なわれている所があるということを聞いておりますけれど。お釈迦さまの教えを説いた経典が、自分たちの都合の悪い所は排除していくという形で使われてしまう。でもそこに、ウイルスが敵だとか、退散させるとか言っている…

かかった人を排除して、その家族も排除して攻撃するような我々の心というのは、現代においても変わらない。私たちの心自身が、その疫癘とか、こういうコロナのことの中で、人が病で死んでいく中で恐怖心、恐れの中で、実は私たち自身が恐れる心はどこから来ているのかという形で問いかけられているんですね。親鸞聖人のご一生は死ということからずっと問われ続けてきた人生じゃなかったでしょうかね？　そしてその中でお経の言葉、南無阿弥陀仏とかがそれにこたえていくような意味を持っていたのではないでしょうか。そしてそのことを通して自分たちの存在の意義、生まれてきた意味、生きてる意味ですね、苦しい、悲しいことがある中でも自分をちゃんと生きていけるような、そこに人生生き方、それを変わっていくことや、終わっていくことや、死ということをくぐりながら、自分と今を生きていく世界がそこに南無阿弥陀仏によって開かれてきたのではないでしょうかね。そういう教えであったということが、親鸞聖人の死によって、あらためてそこに問われたんですよね。当時の方々は。だからもう一度そのことを通して南無阿弥陀仏のお経の心に触れていかなきゃならない。親鸞聖人のお正信偈、ご和讃に触れていかなければならない。その心を聞いていかなければならない…と言って仏事を行なってきた訳ですよね。仏事というのは法事です。法に遇う出来事ですね。法に遇う行事です。死ということを通して私たちが問いかけられている中で、そのお経の言葉に触れ、南無阿弥陀仏の言葉に触れて、法に触れていく行事なんですね。そこに何度も言うように、私たちが本当に生きていく世界が開かれてくるということではないかなと感じることです。この報恩講ということの中で、毎年毎年そのことを確めながら来た訳です。そのことをお勤めする場が、道場、つまりこういうお荘厳があって、お経があって、お勤めが出来るっていう形ですね。教えに触れていく、法に触れていく場所ですね。そこでご法事、仏事が勤められていく訳です。ですから、私たちのお寺は報恩講をお勤めするために建立されて来た。死という

ことを通して、問いかけられていることをお念仏に確かめていく場として開かれてきた。ですからお盆もお彼岸も、お正月もお通夜・葬儀もご法事も、普段のお参りも、お墓のお参りも、みんなの報恩講という精神で行なわれてきたんです。そこに先程言いましたように、死ということを通して教えられている世界がある訳ですね。我々は、嫌なものは嫌なんですよね。だから我々の思いというのはどういう思いでいるかというと、自分の生きていく世界には、嫌なものが入りこまないように…と思って生きている訳です。それは言葉を変えれば、自分の世界はいつでも自分が安心出来て、安全で、安定しているというかな。そういう境界を持って生きているんですね。境界です。内と外です。この「内」に危険なものが入ってきちゃダメなんですよね。ここが危険に晒される。怖い。嫌だ。そういうものはない方が良い訳です。そうするともちろん死というものは嫌だし、都合が悪いものは嫌な訳ですよね。もちろんコロナも嫌な訳ですよ。コロナに感染した人が自分たちに触れると感染してしまうので、排除していくということの中で、非常に攻撃的になる。そういうものを我々は持っている訳ですね。自分の世界は良い世界でありたい。何事もなく安心・安全・安定でいたい。そして自分の安心安全・安定を脅かすのが、善悪の境界。あるいはそれを心の垣根。あるいは裂け目。こういう言葉が用いられても良いのかなと思います。ですから我々はやっぱり、安心・安全・安定ということがいつも本音としてありますから、それを維持し、保持していくと言うんですかね。そうするとそれを脅かすものは排除ですから…排除というのは消すということですから、それは暴力ですね。人間という存在はね、自分の世界を大事にして、良い世界にしていこうとする中で、いつも暴力というものを内在していたんです。まあ、良い例が「香港国家安全維持法」でしょうかね。この中に安心・安全・安定を脅かすものは異物。異物は都合が悪いから排除していく訳です。これを仏教では分別心。善いか悪いかを分けていくんです。正信偈の中に、"善悪"という言葉が三ヶ所出てくるんですが、その中の一ヶ所に、すべては凡夫（私たちの存在のこと）である。凡夫とは何かと言うと、善悪の境

界を持っている存在だって言うんです。ですから「一切善悪凡夫人」という言葉があるんです。赤い勤行本の12ページにあります。そういう私たちの相・存在があるということですね。で、この分別心というのを別な言葉で言うと、煩悩と言います。煩悩。煩悩成就の凡夫と教行信証の中に親鸞聖人はおっしゃっています。煩悩がすでに成就している凡夫。それは善悪という境界が私たちの中にあるんだということ。終わる…死ということに対する私たちの嫌悪怯え…そういうものが私たちの中に起こってくる時に…起こるということは、煩悩が顕在化する訳ですね。出てくる訳です。すでにあるものが、あらためて出てくる訳です。差別はもちろんいけない訳ですが、差別するような心は、実は私たちの中にあるということですね。それが私たちの上に危険が迫った時に出てくるんですよね。自分の身に危険が迫った時に、それは出てくる訳です。自分の身に受けていかないと出てこない。死ということもそうです。身近な人が亡くなった時に出てくるんです。それで煩悩ということですから、安心・安全・安定というのは、相手の存在がどういう存在かなんて見えない。

ですから煩悩は見えない訳です。それを正信偈では「不見」と言う言い方をされますね。赤い本の29ページに書いてありますね。「煩悩障眼雖不見」…煩悩によって眼が覆われて見えないって書いてあります。見えないんですよ。自分がそうやって自分の身を守るために暴力的になっている、あるいは攻撃的になる…ということも相手の存在を傷つけているとか、貶めているとかいうことに、なかなか気づかない。見えているようで見えてない私たちの現実がある訳ですね。先程言ったように自分の身に迫ってくる時に、そういうものが顕在化してきますから。でもその時にですね、立ち止まって自分の姿を見つめていくような世界を、実はいただいているんですよね。そして、教えの言葉に遇ったなら、すごい意味を持つ訳です。去年の12月11日から今年の3月2日まで、コロナの状況の中でですね漫画家のきくちゆうきという方が4コママンガを毎日ツイッター上で更新されていた

んですね。それは非常に人氣があって沢山の方がネットで毎日、その4コママンガを観ていらっしゃったんです。その4コママンガ、皆さんもご存知だと思いますが、『100日後に死ぬワニ』という題です。一日目…ワニくんがテレビを観ています。ワニはテレビ観ませんよね？この ワニくんは擬人化されている訳です。友だちがいて、職場があって…。この一日目のページの下には、死まで99日って書いてあるんですよ。で、二日目…通販の布団だね。注文の電話をするんです。「羽毛布団(ふとん)ください」：すると「一年待ちになりますが宜しいですね？」と返事があるんです。一年後ですよ。100日後に死ぬんだから。この時はもう、死まで98日だ。ワニくんは100日目に友だちと花見に行く約束をしてて、彼はなかなか来ない。つまり、約束の場所に行く途中でたぶん…交通事故で亡くなっていた描写でした。そこに登場するワニくんも、友だちも、皆彼が100日後に死ぬって思ってない訳です。つまり3月20日に死ぬって誰も思ってない訳ですよ。誰も思ってないんだけども、私たち読んでる者は、あ～100日後に死ぬんだなと、それが分かって読んでるし、作者も、そういう設定で描いているんです。それは

ねえ、やっぱりこの何氣ない一日一日の描写がありますけども、その何氣ない一日一日の描写がものすごくね、かけがえがないですね。きっと読者の方もそうじゃないでしょうかね。コロナ禍の状況の中で、不安な中で、こういう状況の中であったとしても、一日一日は実はかけがえがないんだと。ワニくんの存在も登場人物たちの存在も皆、動物として描かれているけど、一人一人の存在は、そのいのちは、かけがえがないんだなって思いますねえ。そういう風な印象を受けました。そしてこの「100日後に死ぬワニ」の連載が終わったとたんに、プロモーションが始まりました。この本もそうだけど、映画作るとか、グッズを販売するとか、ある有名なアーティストとコラボして、ポップアップストアをオープンするとか、矢継ぎ早に発表されたんです。まあ～ビジネスですよね。これは仕方のないことなんでしょうけど、読者の方々はものすごく反応したんです。ネット上で炎上したんですよ。炎上するってことは、批難・批判が集まる訳です。ワニくんの一日一日の存在そのものの尊さがあるじゃないですか。ワニくんの死は、多くの人々の感動を呼んで、様々な感想がリアルタイムで

ネット上に飛び交ったんですが、その感動がまだ冷めやらぬうちに、ビジネスが展開されたからですね。ワニくんの一日一日を利用して商売する。人間の存在を利用して…。まあ、何かそこにかけがえのない存在だっていうことが、ないがしろにされて、ひとつの商品、モノとして扱われてしまった…。それに対する嫌悪感じゃなかったのかなぁと感じさせられました。尊厳の反対はプライスだって、カントという哲学者がおっしゃっていました。尊厳の反対はプライス。価格。つまり労働力としての価格。人間のいのち、存在ということを、どういう眼で私たちは見ているのかってことですよね。経済の発展の中でね、自分たちが豊かになっていくことは、安心・安全・安定じゃないですか。だけども、それに見合わないものはみんな排除される。利用出来なくなったら排除される。そういうことも言えるのかなということを感じました。コロナウイルスは、自然の中のことだから、先程言ったように、私たちは自然からも問いかけられているのではないでしょうかねぇ。だけども問いかけられている実感はないですよね。私は九州は熊本の天草の生まれです。実家は不知火海の島でした。不知火海というのは、天草と水俣の間です。私は小・中・高校の時に、その不知火海で何が起こっているのかってことは聞いてきました。皆さんもご存知のように水俣ですから、「水俣病」ですよね。不知火海に点在する島々の人たちも、手が痺れたり、身体が痺れたりする人たちも出てきたらしいですね。高校の時の友人がそこから来てましたけど、猫が狂ったようになって、海に飛び込んで溺れてしまうとか、そういうことがあったということを、その同級生から聞きました。私は不知火海に行ったことがなかったので、話を聞いただけでした。でも、高校2年生の時に、図書館に行ってユージン・スミスという人の写真集を観たんです。彼は水俣に住み込んで奥さんのアイリーンと一緒に水俣病患者とその家族を撮影しました。その人の写真を観て私は愕然としました。これです。(写真集を開きながら)これは水俣湾です。チッソから排出される廃液です。不知火海の海はヘドロの海。私の実家の前の海はものすごく綺麗です。ともに漁師町、同じ環境ですね。だけど自分が見てきた海と同じ海のはずなんだけど、それがこうなっていることに、ものすごいショックを受けました。この海の中には水銀が含まれて

います。その水銀によって沢山の人々が身体を冒されていきました。もうね、海が死んでるって思いましたね。そして魚も死ぬ。その向こうでそれを食べた人間も死ぬ。そういう状況を誰が作ったかと。ロバート・キャパ賞を受賞した写真集です。この写真が胎児性水俣病と認定された、上村智子さん（17歳・1972年撮影）をお母さんがお風呂に入れている場面です。ものすごく優しい眼差しですね。この写真で胸に刺さるのは智子さんの存在の尊さですよね。あたりまえの生活を奪ってるんですよ、チッソは。我々はやっぱり、ものすごく罪深いんだなぁということですね。私が水俣の海から感じたことは、死です。人間も死んでいく。自分たちの健康も奪われる。生活もね…難しくなる。差別もされる。そして補償交渉が進んで、補償金を貰えば、またそれで妬まれる。二重、三重、四重苦です。そういうことを作ってしまうような、作り出してしまうようなものは、実は私たちの中にあるんだと。緒方正人という人は、水俣病患者の原告団だったけれども「チッソは私であった」という本を出していらっしゃる。自分がもしチッソ社にいたら、自分も同じことをやっていただろう…やはり自分も同じように人間を見失うものがあると。チッソや国の役人たちも実は人間なんだけど、人間を見失うものを持っているから。だから自分はチッソや国の役人たちの中にある〝人間〟に呼びかけるんだと。ずっと一人でチッソの前に座わり込んでね、一人一人に呼びかけていかれた人がいらっしゃいます。真宗門徒ですね。人間に呼びかける。そういうことをお示しくださっておられます。人間のどうしようもない姿を痛み悲しんで仏教の教えが生まれてきました。死ということ、終わっていくということをくぐって、我々の心がものの見方、考え方が、どうしても自分たちのことだけしか見なくなってしまう。そこに、そのことをすることによってまわりがいかに傷ついていくかっていうことは、あんまり思わないような私たちの心がある。そういう姿であるということに、もう一度たち返っていくというか、そういうことを深く痛み悲しんでこの南無阿弥陀仏の教えは、私たちに届けられ、それを報恩講という仏事を通して毎年毎年確かめ、毎日毎日確かめてほしい。そういうことが親鸞聖人の願いであるし、親鸞聖人の報恩講を勤めて来た多くの先輩たちの願いであるし、又、それはもともと南無阿弥陀仏そのものの願いであるし、もっと言うならば、私たちが失ってしまっている人間そのものの願いですね。こういう時だからこそ、触れていかなければならない、聴聞していかなければならないということを切に思います。終わっていく中で、有るものが消えていく、失われていく中で、それを

言葉で表わせば、〝死〟という事実の中で私たちは今、本当に人間として大切なことが問いかけられている。そこに南無阿弥陀仏の教えがちゃんと答えていく世界である。それを報恩講という行事を通して確かめ合ってきた。確かめ合っていかなければならない。それが今日のこの場の大事な意味じゃないかということですね。私のお話しは、ここまでにしておきたいと思います。どうも有り難うございました。

高徳寺 報恩講 法話

◆講師　海　法龍　氏

『人間の本質』

～新型コロナウイルス感染拡大から問われていること～

二〇二〇年 十月廿四日

（文責・高徳寺 住職 釋義祐）

お話しに出て来た写真集&本

◆『入浴する智子と母』
この写真はLIFE誌1972年6月2日号に掲載された。そして世界に衝撃を与え、新聞や雑誌、国内外の写真集、ポスター、学校の教科書などにも使われた。撮影から6年後の1977年12月5日、家族の深い愛情に包まれた智子は、21歳の若さでお亡くなりになった。
※2021年9月23日より映画「MINAMATA(ミナマタ)」が公開される。

◆漫画家、きくちゆうき氏がツイッター上で発表し、多くのファンを獲得していった4コマまんが。ワニの死まであと○日という、カウントダウンが進むにつれツイッター上で大きく注目を集めフォロワー数は200万人を突破するまでになったが・・・。

♦ おかげさんで爽やかな秋晴れとなりました。

《 コロナ下での報恩講 》

法話のご講師に海法龍先生をお迎えし、寺族とスタッフのみの内勤めというスタイルで厳修させて頂きました。これも有ること難しのおかげさんだと思っております。

♦ 毎年 満堂の外陣もこの通り…でした。

<小笠原 翔さん>

♦ お隣りの源通寺の副住職小笠原翔さんには前日と当日の録画作業、そしてお父様でご住職の小笠原円さんと2人で編集ならびにYOUTUBE配信までをお手伝い頂きました。本当に助かりました。この場を借りて御礼申し上げます。m(__)m

～コロナ禍だからこそ味わいたい御文～

『疫癘の御文』

当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。これさらに疫癘によりてはじめて死するにあらず。生まれはじめしよりして、さだまれる定業なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。しかれども、いまの時分にあたりて死去するときは、さもありぬべきようにみなひとおもえり。これまことに道理ぞかし。

このゆえに、阿弥陀如来のおおせられけるようは、「末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべし」とおおせられたり。かかる時はいよいよ阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、極楽に往生すべしとおもいとりて、一向一心に弥陀をとうときことと、うたがうこころつゆ・ちりほどももつまじきことなり。かくのごとくこころえのうえには、ねてもさめても、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏ともうすは、かようにやすくたすけましまし、御ありがたさ、御うれしさを、もうす御礼のこころなり。これをすなわち、仏恩報謝の念仏とはもうすなり。あなかしこ、あなかしこ。

御文　第四帖九通

「疫癘の御文」（一四九二年六月）

現代語訳

近頃、多くの人が伝染病にかかって命を落としています。しかし、人間というものは、伝染病が原因で死んでいくものではありません。人間は生まれたときから、必ず死んでいく「いのち」を生きているのであり、それが道理なのです。そうとは言え、今、このように多くの人が亡くなりますと、きっと様々な祟りや前世の行いによって、伝染病が流行し、人間は死ぬのだというように人は思うものです。阿弥陀如来は、「末世の凡夫や罪業の私たちの罪が、どれほど深くとも、如来を一心にたのむ衆生を、必ず救う」と誓われました。このような時こそ、いよいよ阿弥陀如来を深くたのみ、お浄土に往生できると信じ、一心に阿弥陀如来を尊び、疑うこころを露・塵ほども持つべきではありません。このように心得たうえに、寝ても覚めても「南無阿弥陀仏」と称えるお念仏こそ、私たちを必ず救いとってくださる如来のありがたさ、うれしさの心から湧き出るお念仏なのです。これをすなわち、仏恩報謝の念仏というのです。

◆この御文は、蓮如上人が78歳の時に書かれたものです。当時、伝染病が流行し、多くの人々が亡くなっていかれました。そのようななかにおいて、蓮如上人がまず人間の道理（人間は生まれたからには、いつか必ず死を迎える）を語られ、それから念仏を申し如来の願い（本願）に目覚めよとすすめられるのは、人生においての不安を取り除く方法を示すのではなく、我々の中にある不安を受けとめ、そのことを通して、真実に触れながら、〝今〟を歩んでほしいと、願われているからではないでしょうか。まさに、今、コロナ禍を生きる我々に宛てたお手紙といえるでしょう。

あとがき

毎年お勤めさせて頂いている報恩講。当たり前のように日時を決定し、当たり前のように縁の有る方々がご参詣くださって、仏法を聴聞し、正信偈をお勤めし、御文様を拝聴して、法友と語り合う……。今回はいつもと違う感じでしたが、ご法話をネット配信と、別冊という形でお伝え出来たことが何よりであります。あとがきを書いている、今現時点も、緊急事態宣言中である。思うようにはなかなかいかないが、身の事実から目を背けずに歩んでいきたいと思う、秋彼岸前…。

釋義祐

発行日　2021.9.20

発　行　真宗大谷派 高德寺

編　集　住職 新井 義雄
（法名：釋義祐）

〒164-0002
東京都 中野区 上高田1-2-9
☎ 03-3368-6947　FAX 03-3362-8019

《表紙の絵》
「アマビエ」

お寺のQRコードです。